

### 3. 肉用牛経営における後継者支援対策

玖珠家畜保健衛生所  
○平川素子 里秀樹

#### 【はじめに】

大分県の肉用牛飼養戸数および頭数は、高齢化による廃業などで年々減少しており2014年の農家戸数は2000年の半数以下の1450戸となった。玖珠家保管内の肉用牛飼養農家戸数は384戸（2014年）であり、そのうち繁殖雌牛20頭以上飼養農家かつ40歳未満の後継者がいる農家は19戸、全体の約5%である。当家保では、うち14戸について毎月定期的に家畜伝染病予防事業などの衛生検査や繁殖検診などで巡回指導を行っている。

このような状況のなか、当家保は若手後継者と積極的に関わってきているが、大分県の基幹産業である肉用牛経営の将来が憂慮される状況にあるなか、次代を担う後継者をどのように育て支援していくかが今後の課題のひとつである。

今回、後継者が就農時に規模拡大した1戸について、生産性向上を目的とした技術支援に重点的に取り組んできたので報告する。

#### 【農家概要】

後継者は2014年現在33歳。後継者就農前は繁殖雌牛30頭の兼業農家であった。その後、27歳で人工授精師免許を取得。29歳のとき、就農を契機に2011年6月に廃業する農場から依頼されて繁殖雌牛50頭を購入するとともに農場施設も借り受け全面移転した。このとき、父親は肉用牛の飼養管理を子どもに任せ、第一線を退いた。肉用牛飼養経験に乏しい後継者は、一気に増頭した状況のなか労働力不足もかさなり、次第に牛の衛生管理状況を適切に把握することができなくなったため、2012年8月から重点指導を開始した。

今回、浮き彫りになった問題点は、以下のとおりである。

- ・父親が飼養管理から離脱したため、労働力が不足
- ・購入した繁殖雌牛群の栄養状態の悪さ
- ・経営資金は父親が握っており、後継者は給料制（定額）
- ・牛舎面積に対する繁殖雌牛の適正頭数は60頭程度であるが、牛舎の使い勝手が良くない  
うえに、過密飼育状態であること

一方、利点としては

- ・家畜人工授精免許を所持し、発情発見や人工授精業務は得意としていること
- ・夫婦ともに肉用牛経営に意欲的であることなどが挙げられる。

## 【取組内容】

1 繁殖雌牛の繁殖台帳を家保が作成し、農家と家保で共有して情報を逐次更新、管理することとした。購入した繁殖雌牛群は栄養状態が悪く高齡や長期不受胎牛も多かった。そのため、牛群の再構築を目的に、家保が毎月実施する衛生検査の結果は獣医師に連絡、迅速に治療を行うなど繁殖障害対策を実施した。農家、家保、診療獣医師が問題意識を共有し繁殖成績向上を目指した（図1）。

2 子牛の育成については、移転当初から早期離乳方式に取り組んでいたが、下痢等で発育不良に陥る子牛が多かった。原因究明のため病性鑑定を実施した結果、寄生虫が原因であることが判明した。その対策として、コクシジウムの駆虫プログラムや生菌剤の投与などの衛生プログラムを実施した。また、簡易カーフハッチや子牛用ベットの利用を推進し、哺乳子牛の保温対策、衛生対策を実施した（図2）。

3 早期離乳方式を実施している優良農家の視察を行い日常の飼養衛生管理を修得させるとともに、必要最低限の経営経費の支出等については父親との協議を実施した。

## 【結果】

1 移転当初は繁殖雌牛85頭であったが、繁殖台帳を活用し淘汰対象牛を摘発、計画的に順次更新した結果、2014年9月現在で繁殖雌牛61頭、育成牛7頭、計68頭の牛群に整備した。母牛管理の労力も減少させることができたため、後継者が管理可能な頭数になってきた。人工授精業務は後継者自ら行っており、現在の牛群は2012年度以降の平均分娩間隔が390日前後と問題なく推移している（図3）。

2 子牛の育成成績を玖珠子牛市場平均値で評価すると、日齡体重(出荷前体重÷日齡)（以下、DG）は、2012年、去勢▲0.09kg、雌▲0.08kgであったが、2014年（～9月）で去勢▲0.01kg、雌▲0.08kgであった。雌は、2013年に成果がでたと思われたが翌2014年に再び差が広がっている。今後はこの結果をどう縮めていくかが課題であるが、全体としては徐々に成果が出ていると考えている（図4）。

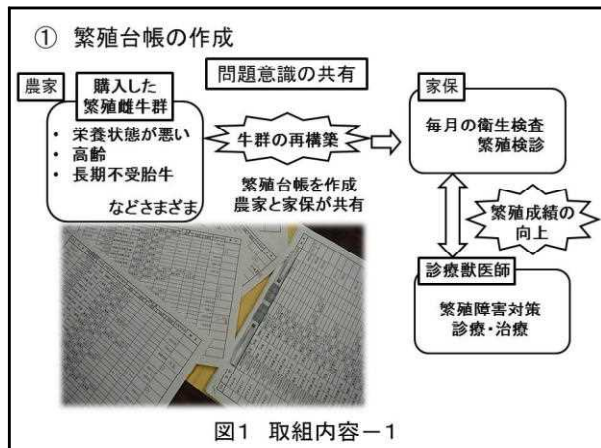


図1 取組内容-1



図2 取組内容-2

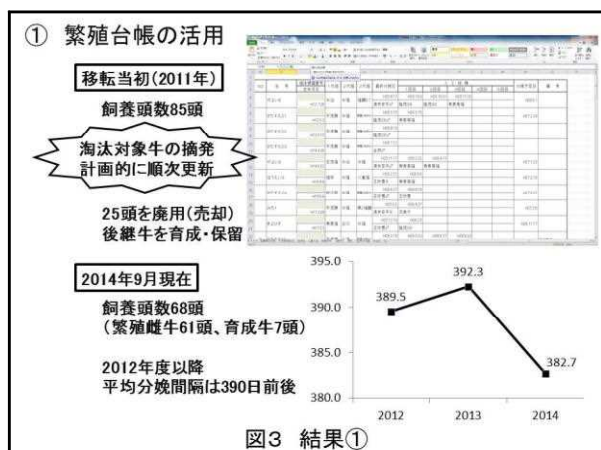
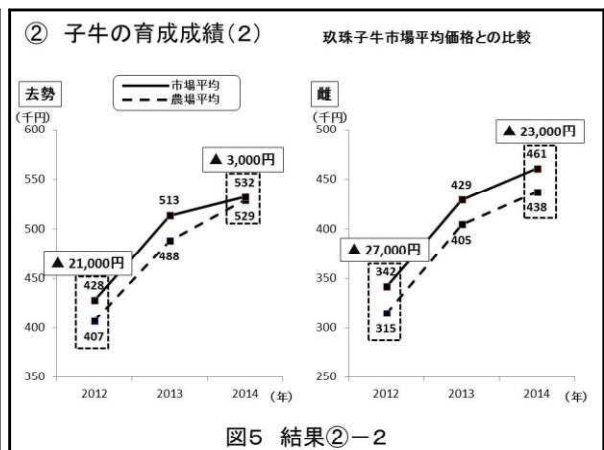
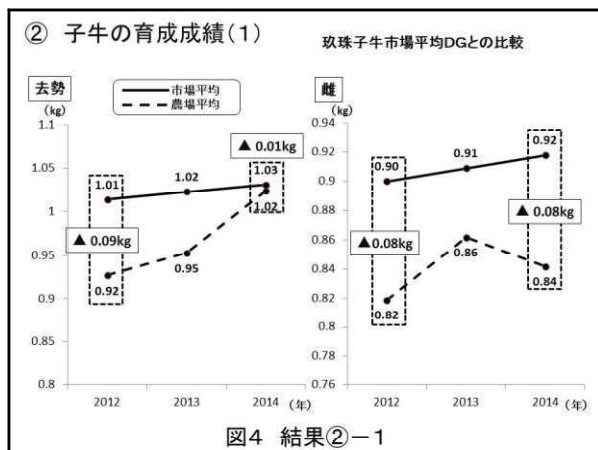


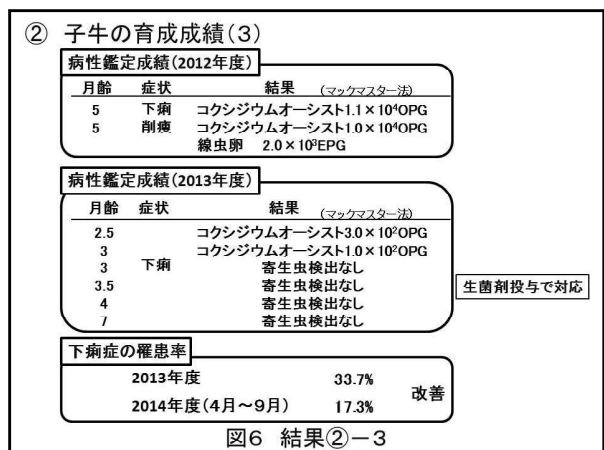
図3 結果①



次に、農場平均価格を玖珠子牛市場平均価格と比較すると、2012年の平均価格は去勢▲21千円、雌▲27千円から、2014年（～9月）は去勢▲3千円、雌▲23千円と、市場平均価格との差は徐々に改善している（図5）。いまだに市場平均価格を上回ることができていないが、市場平均価格が上昇している昨今、市場平均価格を下回っている農家が、市場平均価格の上昇と同様、またはそれ以上の幅で価格を上げ、差を縮めることができたのは成果の現れであると考えている。

また、子牛の個体管理を徹底したことや、簡易カーフハッチや子牛用ベットの利用効果は大きく、2012年度の病性鑑定では下痢の原因が寄生虫であったのに対し、2013年度の病性鑑定成績では6頭を検査し、コクシジウムが検出されたのは2頭でいずれも検出数は少なかった。他の4頭からは寄生虫は検出されず、これらは生菌剤投与で対応した。

子牛の下痢症の罹患率を比較すると、2013年度33.7%から2014年度（～9月）17.3%に改善した（図6）。



3 優良農家の視察により、飼養管理の改善、工夫に対する後継者の意識が高揚した。一方で、父親と話し合いを重ね、子牛販売価格も上昇、必要経費を確保することができた。

その結果、子牛用飼料を購入し使用するなど飼料給与体系を見直す一方、鉾塩を常時設置。また、子牛牛舎の敷料をもみ殻からオガクズに替えたことなどにより、乾燥した清潔な牛舎を維持できるようになった。さらに、優良農家に触発され農場内を整理整頓するなど、現在は清潔な環境下での飼育ができています。こうした取り組みが結果的に子牛の下痢症罹患率低下にもつながったと思われる。

写真は、対策前（指導開始前）と対策後（現在）の子牛牛舎内である。現在は、子牛の疾病予防と損耗防止を目的に自作した簡易カーフハッチが並び、さらにその中には保温対策として自作の子牛用ベットを設置した。また、鉱塩を自由に摂取できるよう常置している。

#### 【まとめ】

今回、後継者就農を契機に増頭した農家で、後継者が衛生管理状況を適切に把握できなくなったため重点指導を開始した。繁殖雌牛の管理については、繁殖台帳を作成し牛群の再構築に取り組み、牛舎面積や労働力を考え管理可能な適正頭数に整備した。子牛の育成では、衛生プログラムなどを実施し個体管理を徹底、飼養管理技術が向上した。平均DGおよび平均価格を玖珠子牛市場平均値と比較すると、市場平均値を上回ることはできていないが徐々に成果が現れてきている。さらに、子牛の下痢症の罹患率も改善している。また、優良農家を視察する一方、父親と資金交渉を重ね、必要経費を確保できたため、飼養管理の改善・工夫に後継者の意識も高揚した。その結果、子牛の飼養環境が改善され、清潔な環境で飼育できている。

飼養規模や資金面等で後継者のおかれた立場は様々であるが、熱意ある後継者を育て支援することが必要である。現在の飼養規模に満足している後継者もいるが、今後は個人経営から企業的経営を目指す取り組みにも挑戦させるなどして、肉用牛飼養頭数の増加に努めていきたい。

